

## 卷頭言

# 「禍を転じて福となす」機会に

柿 沼 肇

(日本福祉大学)

全く思いもかけず昨年末の教授会で教務部長に選任されてしまい、昨年初めからその仕事に携わっている。

私の勤めている日本福祉大学では、教務部長の他に四人の教務委員(社会福祉学部二人、経済学部、短大部各一人)と、課長以下十二人の職員(それに若干の臨時職員)の手によって、ほとんど総ての教務関係業務が担われている。福祉学部II部を一つの学部として数えれば実に三学部一短大(学生五千九百余名、専任教員百名、その他多数の非常勤教員)にわたる膨大な仕事量を、これだけのスタッフでこなさなければならぬのである。そこからくる仕事のきつさは相当なものだといわざるを得ない。

多種多様な業務内容の内、私たちが最も神経を使い、多くの時間と労力をかけて取り組まなければならないものの一つが、次年度の「教育計画」の策定ということである。この作業は夏休み前から開始され、八月の初めには「教育計画基本

方針」「教育計画編成方針」「学年歴編成方針」「時間割編成方針」としてとりまとめられる。これらを九月下旬の全学教授会に提案し、幸いなことに一部分の保留箇所を除いて一度で決定という運びになった。以後、このような基本的な「方針」に基づいて、全学教授会や各学部教授会で、「クラス制科目開講計画」の確定、専任教員の担当科目の決定、非常勤教員に依頼する科目の確定、非常勤教員の選任などが行われる。そしてそれに付随する諸々の事柄の一つひとつをきめ細かく正確に処理しながら、十二月に「時間割」そのものも含めて来年度計画の全体をほぼ完成をみた。このように述べるといとも簡単なように聞こえるかもしれないが、この作業は実際には大変な難作業なのである。時には種類の異なる幾つものことを同時平行的に進めなければならず、どこかで一つつまずくと全体の流れに大幅な遅れが生じてしまうなどということも決して珍しくない。

もつとも現在私たちが味わっているしんどきは、「教育計画」作成というものに一般的に伴うものだけではなく、福祉大固有の「事情」に因るところも少なくない。三年前から実施し始めた「教育改革」(「新教育体系」・コース制の導入、数多くの科目の新設など)がまだ完成年次を迎えていないにもかかわらず、既に色々と深刻な問題が露呈し、当時この改革を中心になって遂行した人たちの間からさえ根本的な「見直し」を求める意見が出されるようになってきている状況があるからである。私たちは、そのような現実の上に、来年度(完成年次)の「教育計画」を策定しなければならぬのである。

そんな中で改めて強く思うことは、「教育改革」という大学の身・質を決定づけるような重要な変革を行うにあたっては真に教職員の英知を寄せ集め、教授会での合意形成を丁寧に行うことが絶対必要だ、ということである。改革には思い切ったリーダーシップが必要だというところで、一部の者の思惑や考え方で強引に引つ張ってしまふのは確かに効率的なように見えるけれど、そのつげは後で回ってくる。逆にいえば多くの者たちがよく考えることもせずに追隨してしまつたり、無関心であつたり、あるいは第三者的に冷ややかに見ていたり、簡単にあきらめてしまつたりというのでは、「教育改革」は本当には進まない。そこでは私たちの見識の高さばかりでなく、教員一人ひとりの民主主義の到達の度合いがどの程度のものであるか試されているように思われて仕方がない。

現在、「大学設置基準」の改訂や大学審議会の新「高等教育整備計画」提示などによつて(しかし、より根底的には国民の期待と時代の要請に真に応える得る大学の創造という課題から)、いずれの大学も自分たちの大学をどのように改善・改革していかなければならないかを真剣に問わなければならなくなっている。私たちの大学でも「一般教育等」の改革をはじめとする「教育改革」は勿論のこと、「管理運営改革」や「大学評価」などたくさんの重要課題の解決が求められている。既に開始されている準備の手を一層早め、来年度前期中ぐらには結論を出し、九三年度から順次実行に移していけるように手はずを整えておかなければならないところに来ている。

私たちは、今大学教職員が直面している改革への取り組みを着実に前進させながら、同時にそれを通して一人ひとりの教職員(できれば学生たちも)の「大学の自治」「学問の自由」の原則に対する認識をより豊かで確実なものにする絶好の機会にしていきたいと考える。何年か後に、あの時「禍を転じて福としましたね」といわれるように、眼前の困難に打ちひしがれてしまわないで自主的・主体的に、知恵と力を出し合つて、大学の未来を(そして私たちの未来を)切り開いていきたいものだと思うのである。